

「荘園研究の現在と未来」

主催：早稲田大学総合人文科学研究センター研究部門「トランスナショナル社会と日本文化」

共催：科学研究費基盤研究(A)「既存荘園村落情報のデジタル・アーカイブ化と現代のIT 環境下における研究方法の確立」

日時：2019 年 3 月 16 日（土） 13：00～17：10

場所：早稲田大学戸山キャンパス 36 号館 3 階 382 教室

〈個別報告〉

高木徳郎「大学院ゼミによる荘園調査の意義—紀伊国鞆淵荘の調査—」

堀祥岳「照葉樹林の信仰・赤米の里—対馬豆殿での取り組み—」

下村周太郎「水利社会論と水辺環境論とのあいだ—弓削島荘/上桂荘で考える—」

似鳥雄一「広大な荘域の調査を、新たな視点と技術で—備中国新見荘をひらく—」

三浦恵子「バリ島のスバックと世界遺産」

〈講演・最終講義〉

海老澤衷「荘園の生成・発展・消滅に関する新たな見解

—フィールドワークから見えてきたもの—」



早稲田大学総合人文科学研究センター研究部門「トランスナショナル社会と日本文化」では、2018 年 9 月 5 日に行われたシンポジウムに引き続き、今回も荘園研究に焦点をあてたシンポジウムを開催することとなった。まず、海老澤先生より開催趣旨について説明があり、本シンポジウムがフィールドワークの有効性と共同研究との関係を考えるものであることが示さ

れた。

個別報告では、まず高木徳郎氏が「大学院ゼミによる荘園調査の意義—紀伊国鞆淵荘の調査—」の題目で発表された。海老澤先生のご指導のもと、紀伊国鞆淵荘の調査がいかに行われたかについて詳細に紹介されたのち、単一のゼミが現地調査にこだわり、広

範囲にわたって荘園研究を持続してきたことの意義について述べられ、特に現地調査こそが究極のアクティブラーニングであることを強調された。また、荘園調査の今後の課題についても見通しを示され、文化財保存運動としての荘園地域調査が今後にも必要になる旨を述べられた。



つづいて、堀祥岳氏が「照葉樹林の信仰・赤米の里—対馬豆酏での取り組み—」という題目のもと発表された。2003 年に対馬で行われた共同研究について、具体的に当時の写真とともに振り返られ、そこで得られた成果について、文献資料の調査・保存、集落および耕地の全面的な復原調査、祭礼・神事などの儀礼調査という 3 つの観点から詳細にまとめられた。

あわせて、素材としての潜在力を見極めてフィールドを選択する必要があること、またそれぞれのフィールドに合わせた調査方法や視角を応用できるかが重要となることを述べられた。さらに、今後の課題として、現地で生活する人々の目線で調査研究ができているかという視点も考慮することが重要であるとし、現地調査の意義について触れられた。

休憩ののち、下村周太郎氏が「水利社会論と水辺環境論とのあいだ—弓削島荘/上桂荘で考える—」の題目で発表された。網野善彦氏の認識と水辺環境論の展開について詳細に取り上げられた上で、具体的に史料に基づき、純粋な自然要因だけではなく人為的要因による環境の変化が生業の変化をもたらしたことを紹介された。また、古気候復原研究の動向と上桂荘がいかに関わってくるかについて取り上げられた。

つづいて、似鳥雄一氏が「広大な荘域の調査を、新たな視点と技術で—備中国新見荘をひらく—」という題目で発表された。まず、新見荘の荘域が広いためにグループで調査を実施することになったことなど、当時の思い出を交えながら調査を振り返られた。

また、影響力のある郷土研究家の研究成果によって従来研究が進まなかった背景について触れ、「よそ者」として関わり、フィールドワークで得た土地勘を用いることで、下地中分や祐清殺害事件について新たな視点で捉え直すとともに、新たな GIS ソフトを活用することによって研究を更新していくことができたこと



を報告された。

個別報告の最後は、三浦恵子氏による「バリ島のスバックと世界遺産」であった。スバックとは、バリ島の水稲農耕社会の基盤をなす灌漑水利組合であり、バリ・ヒンドゥー教の基本原則であるトリ・ヒタ・カラナの哲学に基づいた灌漑システムである。三浦氏は、スバックの価値や都市化による影響、世界遺産に登録される経緯、実際の農耕の様子、スバックが直面している課題など、様々な観点から詳細に報告された。

コーヒブレイクのあと、海老澤衷先生より最終講義として「荘園の生成・発展・消滅に関する新たな見解—フィールドワークから見えてきたもの—」という通底的なテーマのもと、特に「生成と発展」に問題を絞った「「荘」と Villa—東大寺とサン・ジェルマン・デ・プレ修道院—」という題目でご講演があった。まず、東大寺領美濃国大井荘について、大化改新よりも遡る時点で美濃国安八磨の王領からの連続性が見出されること、またそれが朝河貫一の指摘に通ずるものであることを紹介された。朝河は荘園成立に3つのコースを想定しており、著書の中で朝河は「庄」の漢字を用いている。このことから「荘」と「庄」の字の違いについて大漠和を元に検討され、特に「荘」は様々な意味内容を含むものであり、とくに構造物と耕作地の双方を含んでいるため、Villa との比較に適していることを確認された。つづいて、朝河の執筆した *The Early SHO and the Early Manor* を取り上げ、サン・ジェルマン・デ・プレ修道院領と東大寺領荘園の比較記事について紹介された。つづいて、東大寺領大井荘の荘園としての特質を論じられ、特に自然頭首工と水田開発の関わりについて具体的な写真とともに紹介された。最後に、大山喬平氏（京都大学名誉教授）が近年提起した理論に基づき、国家権力が発生する時点で、通常の〈国—郡—郷—村〉系列による間接的な支配と〈荘—名〉系列による直接的な支配の二本立てで体制が出来上がって行くものであり、公地公民制の支配体制が先行し、荘園制は墾田永年私財法の成立（743年）の後に生まれるとする従来の理解は再考を要すると述べられた。

ご講演のあとは、高木氏による閉会の辞を経て、大きな拍手とともに閉会した。



（記録：常田慎子）